2024.11.03

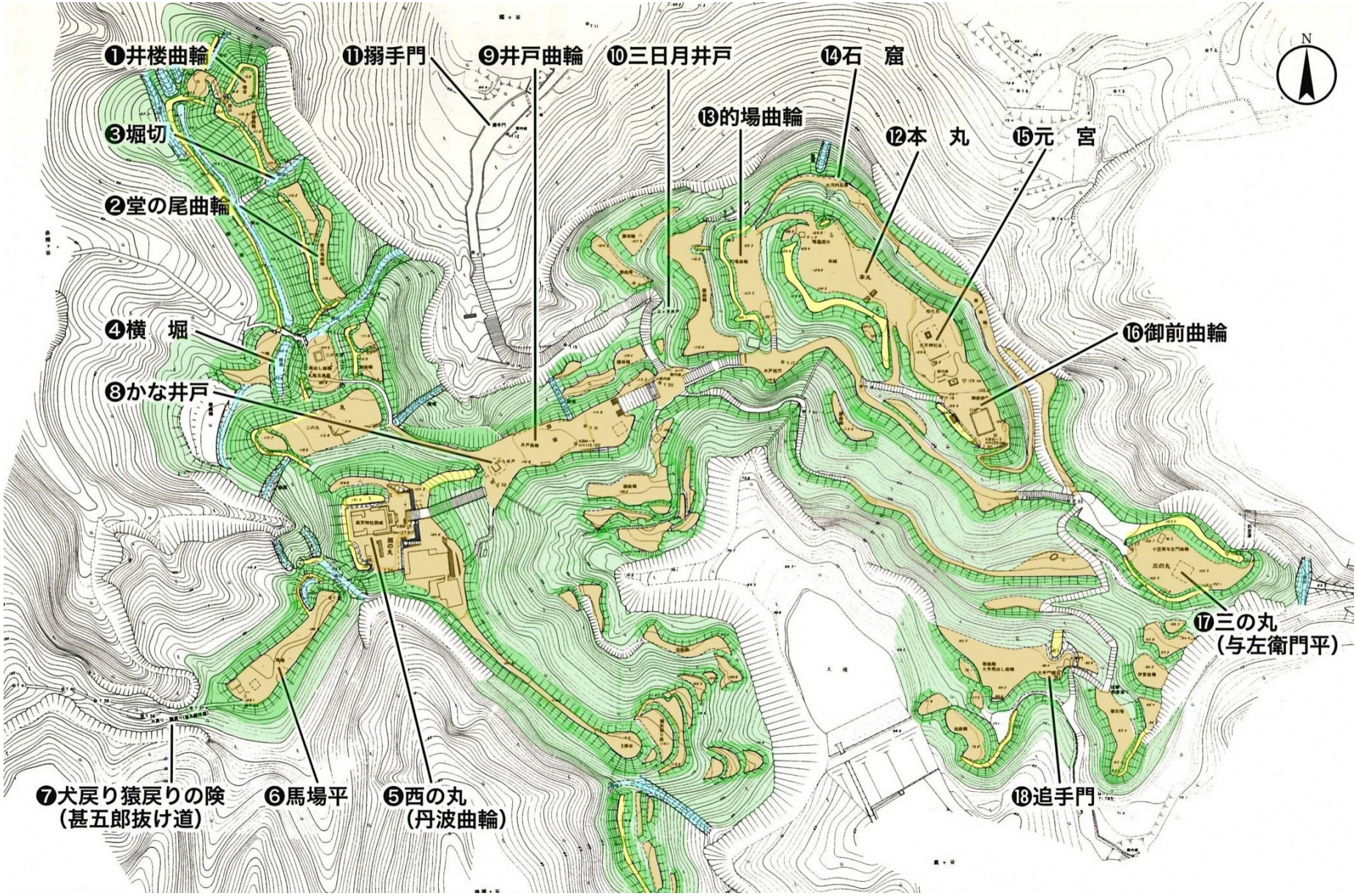
「史跡磨き上げプロジェクト　高天神城跡」

加藤理文（日本城郭協会）

高天神城攻防戦年表

天正2年5月（1574）	20日、武田勝頼が高天神城を攻囲。
6月	17日、徳川方の城主小笠原信興は武田氏に与し、開城。
8月	1日、徳川方、馬伏塚城を改修。
天正3年（1575）	徳川方、岡崎の城山を築城。
天正4年（1576）	徳川方、横須賀城を築城。
天正5年（1577）	徳川方、小笠山砦を改修。
天正6～8年（1578～80）	徳川方、獅子ヶ鼻砦・中村砦・能ケ坂砦・火ケ嶺砦・三井山砦を築城。
天正9年1月（1581）	城主岡部元信が降伏を申し出るが、徳川方は降伏の申し出を拒否。
3月	22日、岡部元信ら全員出撃するが落城。

徳川家康による高天神城包囲網図


❶井楼曲輪
❷堂の尾曲輪
❸堀切
❹横　堀
❺西の丸
（丹波曲輪）
❻馬場平
❼犬戻り猿戻りの険
（甚五郎抜け道）
❽かな井戸
❾井戸曲輪
❿三日月井戸
⓫搦手門
⓬本　丸
⓭的場曲輪
⓮石　窟
⓯元　宮
⓰御前曲輪
⓱三の丸
（与左衛門平）
⓲追手門
N

高天神城堂の尾曲輪実測図

徳川家康による高天神攻め

当初馬伏塚城（袋井市）の持つ戦略的地位が極めて大きかった。

⇒諏訪原城・高天神城を拠点に、西遠江に迫る敵方の監視と、最前線の役目を一手に担う重要拠点であった。

⇒徳川方の本陣、駐屯地・物資集散地　…中遠江から東遠江奪還戦の徳が軍の拠点。

⇒残存ラグーンに面した立地の良さで、兵站確保が容易、東側からの攻撃に対し、ラグーンが天然の堀の役目。

⇒武田軍の西進を阻むのが、初期の徳川方の戦略であった。

天正３年（1575）長篠合戦の大勝利　…遠江情勢は大きく変化

⇒二俣城の奪還に成功　⇒　易々と戦線を東へと移動　⇒　諏訪原城を奪還。

⇒武田軍の遠江兵站基地の消滅　…高天神城の孤立無援化

⇒馬伏塚城からより高天神城に近い岡崎の城山（袋井市）への築城。

⇒岡崎の城山から、横須賀城（掛川市）へと兵站基地を移動。

沿岸ルートの確保　⇒スムーズな物資輸送と兵力の補充・交換が容易に。

天正６～８年　⇒高天神城包囲網と呼ばれる６砦を構築、コ字形に取り囲んだ。

・北から小笠山砦（石川康通)、能ヶ坂砦（本多備後守)、火ヶ峰砦（大須賀康高)、獅子ヶ鼻砦（大須賀康高)、中村城山砦（大須賀康高)、三井山砦（酒井重忠）

・この他 20 ヶ所にもおよぶ城砦群を築き、高天神城への補給路を完全に遮断。

・高天神城の周りに堀を掘り廻らし、柵を幾重にも設けて、人馬の行き来を完全に絶ったと言われるが定かではない。

⇒天正９年３月までの 16 ヶ月に渡って包囲。

⇒『家忠日記』…砦の普請に関わる記載　…　柵、塀、堀切普請

多数の兵力の移動と駐屯を目的に築かれた。

・万が一に備えて兵力の駐屯地を確保　⇒　駿河から武田軍の援軍到来への備え。

・長期化する戦線に備え　⇒　常に食料・武器を常備するための施設。

ある程度の兵力で取り囲みつつ、万が一の後詰に備え、確実に城方の戦意を喪失させ、持久戦・消耗戦の中で、味方の兵力の損失を抑え、自落するのを待つ。

⇒　機能分化した陣城を 20 数か所に配置し、より安全で確実な包囲作戦を継続。

天正９年３月　高天神城兵、全員出撃し全滅　⇒落城、廃城